

トンガ王国における障害者施設歯科医療ボランティア活動の新たな展開

○遠藤真美^{1,2)}・河村康二^{2,3)}・河村サユリ^{2,3)}・
竹内麗理^{2,4)}・田口千恵子^{2,5)}・小林清吾^{2,5)}・妻鹿 純
—¹⁾

- 1) 日本大学松戸歯学部障害者歯科学講座
2) 南太平洋医療隊
3) カワムラ歯科医院
4) 日本大学松戸歯学部口腔分子薬理学講座
5) 日本大学松戸歯学部社会口腔保健学講座

【要約】

トンガ王国の障害者施設利用者が口腔領域に関する保健活動や医療を円滑に受けられるようにすることを目的として南太平洋医療隊が実施した 2005 年から 2008 年までのトンガ王国の障害者施設における歯科医療ボランティア活動について考察する。

【緒言】

南太平洋医療隊は、トンガ王国（以下、トンガ）で歯科保健医療ボランティア活動を実施している。活動内容は、ヘルスプロモーションの考えを軸に現地歯科医療スタッフ（現地スタッフ）と協力をして地域に対する食事・栄養改善、学校保健システムの確立および予防歯科保健システムの推進を目的としている。具体的には、幼稚園と小学校でのフッ化物洗口や健康保健教育、住民に対するオーラルヘルスフェスティバル開催などである。

2005 年からは同隊の活動として障害者施設における活動を開始した。目的はトンガの障害者施設利用者の健康支援であり、利用者が口腔領域に関する保健活動や医療を円滑に受けられるようにすることである。今回、障害者施設における 2005 年から 2008 年までの活動内容について考察する。

【方法】

対象施設は、トンガ本島の障害者施設（通園施設と入所施設の各 1 施設）である。通園施設は発達障害児・者と聴覚障害児・者の各クラスがある。入所施設では約 20 人が生活している。

2005 年～2007 年の活動開始初期には本隊の都合の良い時間に施設を訪れ、現地スタッフと施設職員に対

して障害などの知識普及、施設利用児・者の歯科健診、口腔ケアに関する支援（物品寄付、本人・保護者への歯磨き指導）および食事に関する支援（食内容・食環境指導、機能訓練）を行った。施設滞在の日本人ボランティア（JICA 所属）との連携を積極的にはかったが、通年を通じた支援にはつながらなかった。

2008 年には過去 3 年間と同様の内容に加え、現地スタッフと共に通園施設には午前中から施設終了時まで訪れ、その後、入所施設へ出向き利用者と日常生活を過ごした。入所施設では利用者がトンガ語教室やトンガのダンス教室を開催してくれ利用者との積極的な交流がはかれた。

【結果】

活動は本隊中心型から現地スタッフとの協力型へ移行している。現地スタッフの活動変化として現地スタッフが、①利用者のアセスメント方法、器質的および機能的口腔ケア方法を修得し、利用者、保護者、施設スタッフに指導、②器具の整備（用意、消毒）③歯ブラシ管理方法の検討、④施設内に展示する口腔保健に関するポスター作製などを積極的に行うようになった。また、活動初期には勤務時間中のみ活動協力を行っていた現地スタッフが研修や計画立案などを自主的に勤務時間外にまで行うようになった。

両施設での日常において歯ブラシは共同で使用され、そのことに利用者、保護者および施設スタッフの抵抗はなかった。また、2007 年までは毎年の最終訪問時に一年分の寄付物品を贈呈していたが、その多くが本人に使われていないことがわかった。この問題点に関して歯ブラシに利用者の名前を記載してから寄付することで解決できた。また、名前を記載した歯ブラシを現地スタッフが保管し本隊が帰国後も定期的に施設訪問して歯ブラシを交換するシステムに改善した。これら活動の発展的展開により本隊帰国後も理由ある訪問が実現し、通年を通じた現地スタッフと施設職員の顔の見える活動につながった。

【考察】

国際保健活動には現地の協力が不可欠である。活動の継続によって現地スタッフ、利用者、保護者、施設職員らと本隊の共有時間が増えコミュニケーションが充実し宗教観、死生観、価値観、健康観、国民性の相

互理解につながり、少しずつ信頼関係が生まれ、活動を積極的に受容してくれるようになった。特に現地スタッフが熱心に活動計画立案から協力し、様々な意見を伝えてくるようになったことで活動が本隊の一方的なものから協力型へと幅を広げたと考えられる。